

オリーブの樹

第126号

2014年11月16日 شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



車窓に秋

悔いと悔やし

呑み込んで

生き直そうと

折言いゝあの日

(11.8 達桶の日)

目次

- P 2 9月10月の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 9 戦友西浦隆男を悼む 重信房子
- P 14 読んだ本 重信房子
- P 17 西浦隆男さんの逝去を悼む 早川義輝
- P 18 アラブ物語28 「パリ事件」ハーク闘争から日本赤軍結成へ
—74年(6) 重信房子

重信房子さんを支える会

秋居よ(9月11日~11月8日)

米・サウジ・カタールの金と武器が「イスラム国」の武装力を作り出した

重信 房子

な情報と質問。これが私が日本で「連合赤軍事件」が起きたことを知る第一報でした。

そしてその後インタビュー取材で何度か訪れる山口さんと73年に会いました。インタビューもしました。

また生い立ちを語ってくれ、45年日本敗戦後は死刑判決を中国で受けそうになったこと、日本人なのに中国人として生きてきた罪や苦しい矛盾、戦後日本人として生きていく中でも決して昔出会った中国の人々の寛大さを忘れないこと、自分を時代の加害者でありまた犠牲者と思えば思うほど、パレスチナのように虐げられた人々の何かに役立ちたいと思いつけていることなど、語っていました。「パレスチナ解放を助けてほしい、私は私たちの方法で、山口さんは山口さんの方法で！」そんな話を私もしました。

その後もずっとパレスチナ問題にかかわり、参議院議員として「パレスチナ友好議員連盟」を木村外相や宇都宮徳馬氏らと創り、「アラファト訪日」も実現して活躍しておられました。

その間も励まして下さったこと、そして私が帰国逮捕後は何度か東拘にも面会に来て下さり、物心両面ですべて支えて下さったこと、感謝ばかりです。私への面会などが大げらにならない方がいいのでは……と思っていた私に「あら、平気よ。こないだ日経新聞に連載した“私の履歴書”が本になったけど“はじめに”で私あなたとの面会のこと書いてますもん。本も差し入れましたよ。」とニコニコ笑っておられました。80才を過ぎて昔と変わらずあまりにも若く美しいのは、東拘の係員たちも驚いていました。

数奇で困難な死線も屈辱もそしてまた数々の栄光も受けとめて、しなやかで強い意志を育てた山口さんだから、私の様々の困難や喜びを分かろうとして下さったのだと思います。国境を越え異なる民族の人たちと家族のように共に闘い続けた私には、あなたの生涯はとりわけ共感し学ぶことが多くありました。本当の強さを持ったあなたの華のような生き方に敬意を表し心から哀悼を捧げます。いつも支え励まして下さったこと忘れません。ご冥福を祈ります。

9月16日 今日晴。萩の花が枝にたくさんの花を

9月11日 「9・11」ブッシュ大統領が「これは戦争だ」とアフガンからイラクと「反テロ戦争」をくり返してきた結果が、現在の中東の混迷の引き金になったことは歴然としています。

「イスラム国」は反欧米の憎悪の根拠地のように宣伝され、空爆が米軍によって拡大しています。住民たちこそ「イスラム国」、米欧の犠牲者です。「イスラム国対策」は今のところ米欧政権と矛盾のあったサウジアラビアやエジプト、トルコ、イスラエルまでも共同する「機会」をつくりだしています。パレスチナやシリア、エジプトの住民犠牲者たちへの支援は焦点とならず、イスラエルの戦争犯罪は許されたままです。

日本でも「川内原発規制委が許可」の原発再稼働の方向への記事。

9月12日 久しぶりの晴。もうすっかり秋。見下ろす萩は叢がって広がり、今年の雨のせい例年の3倍以上に大きく茂って、收拾つかない程です。それが風にゆっさゆっさと豪快に揺れるのですが、一本一本の枝は細く長く伸びて、その枝に沿って真中に深紅色の可憐な萩の花が連なっています。明日からは秋の連休です。

デジカメ歌人も「白露」に咲く仙人草の写真を送って下さいました。花言葉は「安全」とのこと。「少し秋めく短歌四首」から「畑の隅捨てられし葦粒粒の花を冠に静かに立ちおり」「糸とんぼ葛の匂いに少し酔うそと摘まむと消えてしまいそう」八王子はとんぼ、精霊とんぼは舞っていますが、そういえば葛の葉も花も糸とんぼもみかけません。東拘の近く荒川土手にはちょうど公判帰りの車道にはみ出す程、今の季節葛の葉が蔓を伸ばし濃い紅色の花をつけていました。

9月14日 夜のニュースで山口淑子さんが9月7日に心不全で亡くなられたことを知りました。思わず黙祷を捧げました。

山口さん最初に接したのは、71年3月突然のペイルートPFLP事務所への国際電話でした。「3時のあなた」の山口淑子と申します。赤軍派が仲間を殺しました、ご存知ですか。山田孝さんが殺されました。あなたのご意見を聞かせて下さい。」たたみかけるよう

パレスチナの旗に包まれしその棺のあまりに軽き幼な命

地中海に落ちる夕日を並び見つ互いの母を語りし友死す

足裏の砂さらわれてゆくごとく奪われてゆく記憶の数々

新聞の訃報が胸を衝く大陸を愛しパレスチナを愛し

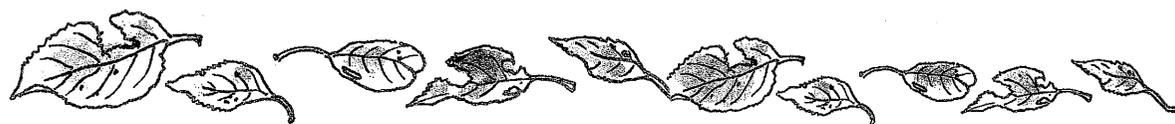
ふりかえる我が曆程に燃えるごと彼岸花一面倒れし友らよ

日曜の静かな獄に夕時雨君死に給ふと電文一行

赤旗に包まれし君聴こゆるかこぞりて歌うインターナショナル

旧友逝きて哀しみ溢るる独房にキンモクセイの一陣の風

刈り残るあわだち草のひともとの確固として立つ獄の落日



みごとにつけています。久しぶりの青空と萩は似合います。

昼食直後地震でやや大きめの揺れ。都心も震度4弱の揺れとか。ベッドの下へ！と支持されて3・11を思い出しつつしばらく避難体制をとりました。

Kさんお便りありがとうございます。庭には紫式部、水引草、赤まんま、からす瓜など自然の草花を育ておられるのですね。子供時代のなつかしい名がならんでいます。S介さん元気ですってね。そうか鳥取は梨の産地でしたね。彼も「オリーブの樹」読んで下さっているのですね、よろしく伝えて下さい。Yさんの連載「はなかみ通信」で楽しみに読んでいます。旧友たちは決してKさんのこと忘れていませんよ。年と共に輝く時代として彼を深く思い返しているはずです。そんな彼と初々しく過ごされた夫人は本当に幸せです。生徒さんに祝福された古希おめでとございます！

9月17日 今日午前中転房でした。運動から戻って汗を拭身で流してほっとしたところ「転房の準備して下さい」との指示。汗をかきながら荷物をまとめてすぐ傍らの房へ。南向きでちょうど萩が咲きはじめたのが良く見えます。

午後は彼岸法要でした。三帰依文の一部のコピーが配られて説法がありました。焼香がたちこめ、思いの他暑い講堂で汗がたらり。

その後主治医診察。体調を確認して鎖骨下のCVレポートのフラッシュ。10月初の血液検査を確認しました。

今日は「はなかみ通信」が届きました。ちょうどKさんから「はなかみ通信」にYさんが夫のことを記していて「嬉しくて涙が出ます」と伝えてくれました。その文を読み始めています。

今日は82年ペイルートからPLO勢力が船で大量脱出したあと、船に乗った誰もが危惧したことが起こった日です。サブラ、シャティーラパレスチナ難民キャンプをイスラエル軍が包囲封鎖し照明弾をあげて支援し、キリスト教徒右派レバニーズフォースの民兵たちに数千のパレスチナ人を虐殺させた日。

ガザ、西岸は今もイスラエルの民族浄化政策は続いています。更に中東は欧米の利益のために、またアラブの王政諸国や政権の権力維持のために、「イスラム国」への空爆から戦争を拡大しています。植民地支配、収奪、ブッシュの戦争がひきおこした今日の事態、反省もなく「モグラ叩き」のような戦争を仕掛けています。戦場は欧米に広がるでしょう。

9月18日 久しぶりに陽が差し、グラウンドに出ました。秋のうろこ雲の下、むくげの返り花が4つ咲き、すすきの間を黄蝶がひらひら。

午後には、「オリーブの樹」125号受け取りました。ありがとうございます。表紙の絵は素敵ですね。鈴を鳴らして、どのような由来のものでしょうか。オンシジウムの花も、くちなしも、ねじ花も、かぼちゃの花も、筆の柔らかい感じが好きです。この夏、こちらもくちなしの花はきれいでかぐわしかったです。選んでくださった歌もありがとうございます。

今号(125号)の歌も日誌も読み返してみると、イスラエルへの憤りとパレスチナのこと、特にガザ攻撃のことがずっと気がかりだったことが記されています。読みつづまたイスラエルへの怒りが湧いてきます。

辻邦さんは「8・6集会」へ行かれたのですね。「安倍にNOだ!」は、まったく同感です。

この間、朝日新聞叩きの合唱に、安倍内閣は加わり、「言論の自由」の名で煽情的に報道するマスコミと、一方に「お上批判」がおそろしく自粛されそうな危惧を感じます。

朝日新聞の「慰安婦問題」は戦時下の性暴力として、日本をも含むアジアの貧しい人々に対する「人権問題」として検証の上、さらに声を大にしてほしい。そうでないと「捏造だ」という大合唱の前で「戦争犯罪」まで無かったことに「靖国参拝問題」まで許されて、益々アジアの人々から孤立する日本。安倍首相の描く自画像「日本」を背負う姿はこっけいであり、危険ですね。

朝日はこれ乗り越えて、エリート(特に米民主党好きの)でない現場の人々の声が大きくなるといいですね。

イラクでは、米軍による「イスラム国」への空爆のニュース。米欧のそして親米王制のまいた種が反欧米勢力を復古的な形で育てたのに、同じ暴力によって再びの戦乱の増大。空爆の下に居るのは、無辜の住民なのです。

昨日書き忘れましたが、昨日の新聞に「女優・李香蘭を悼む・過去への自責の念・行動に」と、四方田先生のとっても良い文章が載っていました。そういえば、9月18日は柳条湖事件83年。山口さん小学生のころです。

「かりはゆく」ありがとう。8月27日の「国賠」控訴審は「棄却」だったとのこと。ちょうど「救援」も届いて、読んだところです。日本では、まっとうな判決はなかなかでない……、「国策」を付託する判決ばかりです。ことに公安事件はそうです。闘い続けることから次の展開を生み出してほしいです。

東京の9・28第2インティファダ記念の連帯の集いは9・27とのこと。N先生の講演と届いたピラを読みつつ連帯! 関西も「オリーブの会」が9・28に連帯の集い。ガザも西岸も何も解決していないイスラエルの暴圧の危機のまま。殺された住民、万を超える負傷した住民、破壊された地域、イスラエルは弁償もせずに、また破壊を企て、また虐殺を企てるでしょう。

9月20日 今日、朝日新聞の土曜日のBE版の「逆風満帆」欄にメイが出ていました。「28年間無国籍だった」というタイトル。来週も続くようです。

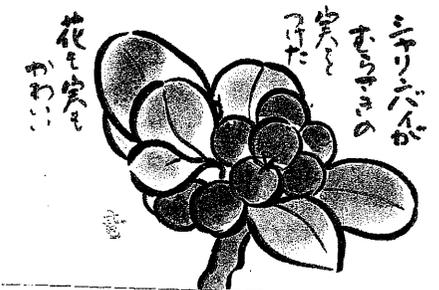
9月22日 昨日からさわやかな秋晴れです。JAPACの「パレスチナニューズレター」、被占領地の人々の様子を伝えているのを受け取りました。パレスチナばかりかイスラエル・ユダヤ人左派の人、普通のユダヤ人の声を現地から伝えています。日本の新聞には載らないイスラエルの弾圧の様子が良く分かり、緊張は今も変わらない西岸地区の様子が特に新鮮です。

9月23日 祝日の今日の昼膳には、おはぎが一つ付きました。

夜のニュースでは、米軍や王制5カ国(サウジアラビア・UAE・ヨルダン・バーレーン・カタール)がシリア領内の「イスラム国」の拠点を空爆したとのニュース。まったく呆れてしまいます。もともとは、サウジ、カタールらが大量の武器を与え、ヨルダンの基地では米CIAらが軍事訓練を施していた「反体制派」が「成長」した姿が「イスラム国」だからです。

80年代、ウサマ・ビン・ラディンらをパキスタン・アフガニスタン・サウジアラビアで、米CIAが訓練してソ連に対抗する「戦力」として武器を大量に与え、闘わせたとの思い出します。あの時には、新鋭の米国製携帯空ミサイル、スティンガーで、訓練・支給して、ソ連の戦闘機を打ち落とさせていたのです。ところが、その「戦略物質」がレバノン南部で対イスラエル機に使われたとのことで、米は大慌てでした。(実際、いくつかレバノンのヒズブラーに渡ったらしいが、どう使われたか、私はあまり記憶していない。)

アフガニスタンからソ連軍は撤退になりそうだし、アフガニスタン義勇兵たちはCIAから離れつつありました。そこで、CIAは「武器回収作戦」を展開したのです。今まで自分たちが供与した武器を高値で回収すると触れ回り、ヒズブラーに武器が渡らないよう携帯対空



ミサイルは、一機につき10万~25万ドルを払うとのことでした。これで儲けた武器商人の知人もいました。当時の回収しまくっていた「正しい教訓」からすれば、まったく学習のない米国のやり方。無尽蔵にばら撒いた米・サウジ・カタールの金と武器が「イスラム国」の武装力を作り出したのです。

しかも、米欧の社会で、格差・差別・失業など、解決できない矛盾を抱えた若者たちが「イスラム国」の「自由」に憧れ、イスラム義勇兵へと加わっていく責任も問われてしかるべきでしょう。

空爆によって関係のない住民を殺し、さらに地域を混乱させ、世界大に戦場を拡げる愚はもうやめるべきです。空爆や武装の全費用を何よりも「非軍事」に使うべきでしょう。

第1に、避難民に最善の物質的支援を行い、学校や産業を再建するための条件を拒否を投じて行うこと。故郷に戻って生活できる希望は何よりも軍事ではなく、非軍事的な財政支援です。

第2に、すでに收拾がつかない程に流入している武器を徹底的に回収、買い戻すこと。これが結局早道なのです。これまで「イスラム国」や、他のアルカイダ系や、反体制派に与えた武器・兵站の額は、すでに何兆円でしょう。加えて、米国は5億ドル(540億円)を反体制派の武装にさらに投じるし、日本も「非軍事」としつつ、反「イスラム国」の有志連合に数えられて、2550万ドル(27億5400万円)を拠出すると表明。空爆の分も含めば、また、何兆円に膨らむのです。この浪費は、武器軍需産業に役立つだけです。この浪費を建設的な方向に転換すれば、地域の失業や貧困の中で、生存のために「イスラム国」などに加わっている人々を潤していくでしょう。

「非武装に向かって「浪費すべし」と、私は言いたい! 「イスラム国」を巨大視して混迷を作り出しているのは、外部からの勢力の介入の結果であること、その反省こそ国連安保理総会で問われるべきですよ。

9月24日 今日、「関東地方更生保護委員会」から

監査官が面接に見えました。ちょうど午後はコーラスの予定と重なりましたが、参加せず、13時から14時40分まで面接となりました。

説明によると、この委員会は長期刑の受刑者は刑法28条によって、その刑の3分の1を終えたら、仮釈放が検討されるという規定に従って、最初の面会に見えたとのことでした。その後は3年に一度位の割合で、必要と考えられる場合、面接をするとのことでした。

質問はすでに9月5日に提出した申告書に従って、より詳しく聴き取りを行っていくものでした。「公判時の主張(上告棄却されたハーグ事件無罪主張など)は、今でも変わらないのですね」と、最後に再確認していました。

私から、「公安事犯に対する仮釈放は無いと聞いていますが、あるのですか?」と尋ねました。「大変厳しいですね」とおっしゃっていました。

9月25日 届いた新聞「シリア領に対する空爆は自衛権の行使」と米政府。「自衛」の名で、自分たちの利益のために空爆するやり口は、イスラエルと同じ。米政府は矛盾のあった親米王制グループを「反イスラム国」でまとめあげ、サウジやカタールも戦争に参加。

「無法者」はこうしたやり口の米政府らであり、「イスラム国」と同じ論理ではないでしょうか。「自衛」の名で侵略は拡大し、空爆されるシリアの町や村の住民は生活しており、ガザ同様住民が虐殺されるのです、ひるがえって、日本も「自衛」の名で「戦争のできる国」へと進む安倍政権の道をなんとしても押しとどめたい。「自衛」は侵略の口実、いつも同じです。

9月26日 今日やっとな「泉水国賠つうしん」NO.4が検閲を経て交付されました。(どこにも黒塗りはありません。)泉水さん、とうとう陳述書仕上げましたね!? 腫瘍炎で筆が握れずの状態だったとのこと。安田先生、山下先生が東京から6回も来てくださり聴き取りながら仕上げてくださいったとのこと、さすがに素晴らしい整理とポイントの陳述書です。みんなが大変な中、大変な泉水さんを励まして支えて、法廷闘争を行っている様子が、ふうさんらの面会記からもわかります。

また、私は今回の泉水さんの陳述書で、逮捕以来泉水さんを支えておられる方々や泉水さんを取り巻く状況が概略大変よく分かりました。何としても外部交通権を回復し、そして差別処遇を越えて仮釈放まで、社会復帰まで、生きて生きて生き抜いてください。もどかしく何もしない私ですが、「日本赤軍」の名で貶

められている数々に胸が痛みます。何と口惜しく、また申し訳ないことでしょう。

今日は週末、日曜日がバースデーになる私に、Mの6歳と4歳の娘からハッピーバースデーのお便りが届きました。絵文字も上手!「泉水つうしん」で胸痛い私に嬉しい便りをありがとう。

9月27日 今日の朝日新聞BE版に、先週に続いてメイの記事。上杉隆さんはメイと一緒に仕事している人ですが、彼のコメントにまた胸が痛い。「一見多様性に寛容に見えるが、排他的なのが日本人。彼女はこれまでよく我慢している」と。メイの能力を評価して一緒にキャスター出演していた「朝日ニュースター」以外にもうんざりだと言う。「彼女の情報をもらったり番組制作に協力させたりするのに、テレビには出演させない。なぜ?と聞くと『だってテロリストの娘だろ?』要するにクレームを怖がっている。政治や社会がレッテル張りをする。愕然とした」と。何と言ったらいいのだろう……。切なくなりますね、日本社会……。どれだけ多くの人が様々な理由でメイ同様の本人と無関係な差別を受けていることか……と。

9月28日 何と素晴らしい秋晴れ、御嶽山が噴火の記事。改めて、この火山・地震列島日本のすべての原発廃止を!と訴えたい。

今日は69歳になりました。振り返ると、どれほど多くの方々に支えられ、励まされて生きてきたことか……と、感謝ばかりです。歳をとる程に未熟さに気がつき学ばねばならないことが増えています。これからもみんなと共に生きていきます。みな、ありがとうございます。

9月30日 もう九月尽、見上げる空は秋空です。羊雲が秋空に群れています。

今日は茶道の時間にちょうど姉と義姉の面会が重なり面会室へ。途中廊下の外にキンモクセイの大木があり花盛りです。窓は閉まっていますが香りに包まれます。面会室では誕生を祝って遮断プラスチック越しに手を合わせてくれます。お互いの家族、甥たちの様子を楽しく聞きました。体調をくずしていたお二人、元気でいて下さい。

米澤さん超多忙の中お便り感謝。「集団的自衛権」「秘密保護法」「辺野古」「脱原発」「Xバンドレーダー」それに「被爆者の会」の仕事に加えて、毎日のたくさんのメールの処理「そろそろ車の運転も考えねばならず、加齢とは不便なものです。」「しかし楽しいことも

沢山あります」と米澤さんらしい前向きな活動ぶり。水戸喜世子さんと知り合ったことは楽しいことの最初に記しておられます。リアリティーを失いがちな獄で具体的な地名、そこでの活動や友人たち、私までいきいきと描くことができます。いいなあ!私も走りたい気分!

デジカメ歌人の「秋がくるハクチョウソウ」(秋分の日)の蝶のように美しい凜とした白。「別名ヤマモ草が本来の名であるが、白蝶草が花の姿に相応しいと思います」とのこと、断然そうです。スッキリしたこの花初めて見ましたよ。“今朝あなたの夢をみました窓を開け少しの未来と風を入れました”何かちがう世界の匂う一首ですね!

10月1日 10月に入ったとたん曇り空。でも南天桐の色がどんどん赤くなり実はちょうど橙色です。萩はほとんど散りました。風はどこかからのキンモクセイの香りです。

I子さんありがとうございます。「祝バースデー」の便りを添えられたみごとなオリーブの実の写真。庭のオリーブ「去年は13粒でしたが今年はまだ数えきれない位!」とのこと。青く豊かなオリーブを見るだけでベイルート、パレスチナが浮かびます!

9月20日の「信原さんを偲ぶ会」90人程の人がみえて親族、小中高の同級生、地域診療所の方やパレスチナ関係、それ以外の人も見えたのですね。「Mさんが房子さんに代わって話して下さってうれしかったです」とのこと。Mさんありがとう。I子さんめざましいアラブ語習得!ダマスカス時代の信原さんの友人メッセージ訳されたのですね!すごい。いい集いだっただけでベイルート、パレスチナが浮かびます!

ちょうどSさんが送ってくれた当日の信原さんの似顔絵、今一緒に届いたのを見ながら書いています。少年のような信原さんです。それがドクターの前向きな意思で乗り越える時の「よし、がんばろう!」という時の顔にとっても似ています。

「ガザ報告9・28集会」志葉玲さんの報告にいつもの10倍くらいの参加とのこと、いいね!“夜更けて茶碗にひびくこほろぎの音”「茶碗にひびく」が光る一句です!プレゼントありがとう!“現代短歌鑑賞辞典”じっくり読みます。

Tさんお便り感謝!送って下さった同封物はまだ未交付です。体調でまわりに迷惑かけられないと「9・28Xバンドレーダー基地設置反対現地闘争」に行けなかったのです。でもTさんは「居るだけで安心」と若手から言われているので、役割はたくさんありま

すよ!

今日受け取った新聞に「頭脳警察と京都大学西部講堂」(京ものがたり。9月30日夕刊。夕刊は翌朝分と一緒に受け取る)が大きく出ています。「三つ星の下自由取り戻した」と。パンタさんが西部講堂の屋根の三つ星を背に嬉しそうに笑っています。パンタさんの来歴、リッダ闘争、西部講堂の三つ星。「時を経て2008年9月〜」と。パンタの西部講堂で「オリオン頌歌第2章」を歌ったことが記されています。これはTさんHさんたちが「さわさわ」の仲間と共にやったのですよね!当時を思い返しちょうどTさんやHさんたちのこと考えていたらTさんのお便りでした!ありがとうございます。

10月2日 久しぶりのグラウンド、通り道のピラカンサの実がもう赤くなっています。南天桐も朱色、萩は終わりすぎが広がり、セイタカアワダチソウが黄色になりはじめています。

午後は主治医の診察で、まだ末梢神経障害の抗がん剤副作用があること、心臓がチクチク痛いこと、これは普段気にならないけれど心臓に意識を集中すると痛みを自覚します。前にもレントゲンでは異常なしでしたが。明日の検査を確認しCVポートフラッシュをして終了。

10月3日 今日は検査のため採血、採尿、潜血反応用検便それにレントゲン検査が午前中にありました。宮崎先生また手術の可能性ですって……。でも基礎体力と強固な意志でこれまでのりこえて来られたので信じています。「俎板の上に乗った鯉の心境でおります。」と言いつつ悠然としておられるのがホッとします。

Tさんからの資料届きました。10・8闘争の中で殺された山崎博昭さんの記念碑を50周年までに建てるプロジェクトに関する資料始めて知りました。10・8闘争の秋晴れの高速道路、救急箱かついで逆走した日が鮮やかに浮かびます。また「第8回反戦反貧困反差別共同行動イン京都10・19」のステキなピラもありありがとう!連帯さわさわの旗のもと!

10月4日 朝日新聞 be 版メイの「逆風満帆」の最終回読みました。朝日パッシングの中よく記事にしていますね。

と、ここまで書いたところ「電報です!」の知らせ。夕食、点呼も終えた今6時半過ぎです。姉からです。「今朝9時西浦氏亡くなりました。U氏より」の電文。呆然として胸や胃がぎゅっと縮まるまま涙。何故?!

友人の嬉しい便りや資料ありがとう。イスラム教徒の友人からは「最近、TVは自称『イスラム国』に、日本人学生が加わりとうしていたというニュースでもちきりです。欧米では『その手に乗ってたまるか』というので、『イスラミックステート』と呼ぶことを拒んでいるのに、日本では彼らの望むとおりに名称を呼んでいます。これも『遠い国』ならではの感覚のズレですね。イスラムの名ではなく、彼らを私は『カルト集団』と呼んで差し支えないと思うのです」とのこと。そういう声は、きっと現地でもあがっていることでしょう。イスラムの平和や平等の観念が、ちがった凶暴なものに刷り込まれていってしまう危惧はとってもよく分かります。

10月15日 このごろ「え？」と聴き返すことが多く、聞き取りにくいので、耳鼻科診察。聴力テストを行ってもらいました。その後、主治医の診察。10月の血液検査の結果を伝えてくれました。

腫瘍マーカーは少し改善していて、CEA 4.1で、正常範囲に落ち着いていました。肝機能もOK。また、レントゲンの胸部、腹部の検査も異常は見られなかったとのこと。潜血反応も陰性。体調は良好です。

でも歯の方が日曜日に折れてしまい、再治療が必要になってしまいました。主治医は、ここの歯科治療を手配して下さるとのこと。根っ子がもう使えないのなら抜歯して、また義歯を指名医に頼まなくてはなりません。抗生物質を処方して頂いて、鎮痛炎症を抑えているところです。厄介ですが……。CVポート洗浄して診察終了です。

友人からの便りで送った書籍が多くて送り返されたとのこと。「1回5冊まで。パンプ類は重ねて3センチを本1冊と数え、それ含めて5冊まで可」6冊だったので、6冊全部送り返されたようです。

10月16日 四方田先生新著（共著）「こんにちは、ユダヤ人です」今、河出書房新社から届きました。四方田先生とユダヤ人ロジャー・パルバースさんの対談。読みやすくて面白そうです！楽しみに読みます。ありがとう。

デジカメ歌人初紅葉の鮮やかな葉っぱの写真。寒露のもの。絵の色彩より鮮やか。10月は異称「紅葉月」“身ついばまれ、翅だけの揚羽カサコソと音し碎ける勝手口の朝”これからいい季節の京都、10・19円山公園、あなたもみんなと会おうのね?! 連帯!

10月17日 朝ペランダでラジオ体操だけ行って抜

け、歯科診察。結局根っこを抜去してもらいました。空いたところに指名医に義歯を加工してもらおうこととなります。移監して指名医が認められるかわからないのを考えると、今修正加工してもらえるので、良いことと考えることにしました。歯、耳、眼と存分に酷使してきたので致し方ないかなと思ひ、遅ればせに大切に扱っています。

今日は若ちゃんの命日だったと思います。頼りになる戦友でした。彼のことを追悼して空を見上げるばかりです。合掌。

10月20日 今日は運動会です。患者たちはすべて会場設営された最後の12時に参加します。12時に出発しグラウンドに着くと既に男性患者、懲役は座っています。すぐ昼食。さんまの蒲焼、ほうれん草のゴマ和え、さつまいも甘露煮、桃缶の黄桃半分入りの当所製折詰弁当にりんごジュースとお茶。それにカルビーポテトフライ85gパックとロッテチョコパイ一個。

食後、所長と来賓が入場門から入場して運動会が始まります。来賓の十名位のうち茶道の先生と法会の時にいつもみえるお坊さんだけわかりました。40m走から始まり、赤・緑・白の男性懲役の仕事別の部署対抗です。女区は懲役で補助作業の人と患者で医師の許可下りた人の10名弱の参加。堂々の入場に見学組の私たちはやんやの拍手。女子はサッカーボールを蹴りながらボールを回って順番を競ったり、男子は400m走、障害物リレーなど本気勝負です。来賓も参加。玉入れもありました。お菓子を食べながら声を張り上げての声援。応援合戦もありました。午前は晴れた青空だったのですが、午後は曇り空。それでもちょうどいい気候。紅組チーム優勝旗授与のころにはちよつとぽつりぽつり雨。雨に降られずに運動会を終えて房に戻ると3時過ぎ。2時間ちよつとの運動会、みんな本気だして楽しんでいるようでした。商品は一位シャンプー、二位ノート、三位カイロ一個です。

今日は丸さんの64才の誕生日。旧友の誕生日でもあります。おめでとう！懐かしい日々を描きつつ。

10月21日 今日やっとクラケンの送った資料の交付を受けました。土曜会、若森さんの「ヘイトスピーチ運動」のことは資料なく知りたかったけど、他の資料は「原発再稼働反対柏崎・刈羽」報告から11月のスタディーツアーも、10・8山崎博昭プロジェクト趣意書も読みました。10・8プロジェクトのそれぞれが歴史的な戦いの日を刻み継承する姿として追悼鎮魂碑としてたち現れることに連帯するでしょう。私も

当時10・8闘争に参加した一人として賛同連帯します。

またとても嬉しかったのは明大土曜会主催で「オール明治で12月6日土屋源太郎さんの闘いを支援する集い」一語ろう明大学生運動60年の軌跡一案内です。これまでも「土屋さんと話を聞く会」を行ってきた土曜会が土屋さんと共に行動する要になっているのが嬉しい。土屋さんは80才だそうです。53年入学し中教委員長、都学連、全学連書記長を担い55～57年砂川現地闘争を闘い「伊達判決」を受けた当事者。現在「伊達判決を生かす会」の共同代表で「砂川事件最高裁判決無効」を求める闘いの中心です。50年代から70年代の学生運動をふりかえり現在の声と行動に生かすことに連帯！出席に〇印をつけて送りました！

今日は昔の10・21国際反戦デーの日です。宮崎先生卒寿祝！どうぞお元気でいて下さい。

10月22日 今日で夏期処遇は終了し、明日から冬季処遇です。と言っても夏物パジャマや半袖作業着を回収して、合物のズボン下や長袖などの綿に変わるだけで、本格（カイロや厚手冬物など）は勿論まだです。肌寒くパジャマ長袖にカーディガンがちょうど良い季節です。もう一ヶ月で八王子はすごく寒くなります。

今日Uクンの送ってくれた西浦クンの通夜、葬式の写真とCさんの送ってくれたDちゃんの撮った葬式の写真受け取りました。赤旗に包まれた棺の西浦クンそして友人たちの花に囲まれて旅立った様子がわかります。Dちゃんの撮ったさわさわの旗が私も会場に居る気分させてくれます。西浦クンや香り女さんが預かってくれていた旗のこと、Tさんの献花の心使いのことCさんの文に記されています。インターナショナルの歌、他ではしっくりしない感じがあるけれど西浦クンを戦友として送るのはまことに相応しい歌となったのです。

Cさん18日奈良人権センターで山本太郎さんの講演にとっても共感したとのこと。「山本さんが当選したのは東京都民1,200人のボランティアが働いてくれたからだ、横の繋がりによって国会議員になれたということ」を説かれていました。ただ名前が売れたからではなく、みんなと共にみんなの言いたいことをわかりやすく訴える力を持った人の方だとのこと。いい教訓ですね、これからの奈良に。

10・19の様子早々と伝えてくれてありがとう！Tさんの言い出しっべのこの集いはもう8回目。年々年寄りみんなの心の拠りどころとなっていて、また少数ながら若い学生も来ていたとのこと。「さわさわ」の



旗を会場で持っている写真、デモ行進中のさわさわの旗嬉しい。「500～600人が京の街人溢れる中デモをやるとやはり壮観です」とのこと。戦友西浦クンがここに欠けているのが何とも口惜しい。

10月24日 午後姉の面会。抜歯したので、また指名医の診察をお願いすることなど頼みました。

Uクン10・19の様子「釜が崎日雇労働組合」Sちゃんをリーダーに300名ほどが轍を林立させて、目を引いたとのこと。開会時には600余名の人々が集まっていて、「さわさわ」やかつての学生運動仲間や万起子さんも。「いつも必ず居た西浦が居なくて、何かぼっかり穴が開いたよう」川内原発再稼働阻止の岩下さん、沖縄読谷村の知花昌一さん、趙博さんと沖縄の三線、歌と演奏の後は、白井聡講演など。集会決議、インターの合唱からデモへ。円山公園、四条通り、市役所へとパレード。「さわさわ」の旗の下、友人たちが和気あいあいと進んだとのこと。S介さんもデジカメ歌人も共に。我らが女性旗手も居ましたか？！

10月25日 「救援」546号で「テロ指定・資産凍結新法制定阻止！ 共謀罪も秘密法も盗聴法もいらない！ 戦争国家の非常事態体制構築を打ち破ろう」の記事に、安倍政権のこの間の危険な動きがまとめて読みやすく載っています。

政権批判勢力を「テロ」扱いし、口座凍結・カンパ禁止など、身近に迫っていることを示しています。権力のやりたいように政権批判勢力をつぶしにかかるのは、自分たち含む経験の示す通りです。「イスラム国」「学生捜査事件」でも、まったく法を歪曲して情報収集し、マスコミを使ってスキャンダラスに報じ、米国には「やっていますよ」とデモンストレーション。こうしたやり口は、今後拡大する危険ありです。

Kさん美しいトリカブトの花。「近所で野性を見つけました」とのこと。毒でもあるけど薬草ですね。そちらも冷えてきましたか？ こちらも11月からすごく寒くなります。でも今年は去年までと違って1ヵ月早

く、11月1日からカイロが許可されました！工夫すれば大丈夫です。11月京都デジカメ歌人もS介さんも会えそうですね。宜しく伝えてください。

今ちょうど「10・19 変えよう！日本と世界 第8回反戦・反差別共同行動イン京都」の資料や写真が届きました。会場の様子、デモの様子も写っています。「さわさわ」の大きくて重そうな旗なびかせて、楽しそうに歩いています。あ、S介さんとデジカメ歌人が旗を持っていますね。S介は相変わらず若い！もう一人の若々しかった西浦クンは居ません。でも万起子さんがみんなと元気に行進していて、Yさん、Tさんも、Dちゃんも。集会で配布されたピラもみんな昔のピラと違ってスマートで、カラフルです。京都の街並みは昔の感じのまま。ほっとします。フォーリンアフェアーズもありがとうございます。これからも楽しみに読みます。

今日は午後茶道がありました。初心者ばかりで、お互いのおかしな振る舞いに度々大笑いしつつ、賑やかでちょっと騒々しい茶会となりました。

10月29日 秋深まり桜の木も黄、赤と色づき、散り始めています。

デジカメ歌人「霜降」の風景は、赤く色づいて円やかなコキア、別名ホウキグサの写真です。燃えたつようです。ユーラシアの奥から中国を経て古代に渡来したもので、強壯、利尿薬に利用されるとのこと。短歌はこの一首を選びました。「街に出る神無月終り灯が燈る 異国の神の光臨の祝い」

午後、主治医診察があり、指名医の再治療について話し合いました。

10月30日 グラウンド30分の運動に出ると、見上げる空は真青。ちょうど良い季節です。もう芝生は緑色から枯草色に変わりはじめて、桜の樹々からは一斉に落葉がはじまっています。

中東も戦火の中、避難民には辛い冬や雪の季節が近づいています。11月になると軍事キャンプのポプラがが落葉し、風にカラカラと木琴のように澄んだ音をさせながら舞いはじめます。「秋の夕不死のシンボルペガサスを探しつ折る無事であれかし」

10月31日 今日からこちらは「冬季待遇」にかわり、厚手のカーディガンが支給されました。「厚め」といっても普通の紺色のカーディガンで夏物とあまり変わらないものですが。それから使用許可になったものは厚手のキルト下着、タイツ、手袋、それに毛布も3

枚になりました。一枚は敷布団の上に敷いて良いのも今日からです。カイロは例年より一ヵ月早く、明日11月1日から使用許可。

今日は雨ですが、まだそんなに寒くはありません。新聞では沖縄知事選が30日告示され記事。「辺野古移転反対」の沖縄の意志が、国民・住民無視の安倍政権に本土も含めて反撃する突破口になりそうです。沖縄の闘いに助けられている現状は、本土からはとっっても見えにくいけれど。

中東では「アラブの春」とほめそやされた民衆の切実な蜂起の出発点となったチュニジアで、ナハダ（モスリム同胞団系の政党）に代わって「世俗派が第一党」になったとのニュース。「世俗派とイスラム系の挙国一致の国造りが成るか初のケース」と注目を集めているところです。

ちょうど読んだ「レバノン化する中東」（フォーリンアフェアーズNo.9、原題「中東における政治的現実主義者の終焉」）の内容を思い出します。この論文はベイルートのアメリカン大学の先生が書いたもので、米国の國務省関係者の論文のように自己検証のない無責任なものとして、分析がしっかりしています。（フォーリンアフェアーズNo.9、No.10を読んだのですが、「イスラム国」への対処をあれこれ論じている中で他のよりまし）

「宗派対立へと中東の流れを変化させるきっかけを作り出したのは2003年のアメリカのイラク戦争だった。その後地政学抗争と宗派アイデンティティーの重なりあいはシリア内戦によってさらに固定化され、これが紛争の破壊性と衝撃を高めている」と捉え「イスラム国」出現も2003年以降のトレンドと捉えている。

米国は「オバマ政権が誕生する前からワシントンはそうすることがアメリカの利害に一致するときには宗派主義の政治化を許容してきたし、地域的敵対勢力同士がシリアで破壊的な抗争をくりひろげている時にも傍観を決め込んだ。問題は、宗派主義は政策的に許容したり抑え込んだりできるような対象ではない」と批判。「良い反体制派と悪い反体制派」をシリア内戦で区別する米欧のやり方の無意味さも語っている。

そして「アラブ文化が民主主義となじみが悪かったわけではない。むしろ石油資源地政学、アラブ・イスラエル紛争の余波が移行を妨げてしまった。」と捉える。

そしてチュニジアは石油資源も無く、イスラエルと国境を接していず、2003年以降も地域の外側に位置していた条件を指摘している。「チュニジアの政治アクターたちは国際的な戦略環境、地域的な地政学抗争

という変数に翻弄されることなく民主化への道を再構築することに成功した。」と述べています。チュニジアも対立や矛盾で揺れるでしょうが、その考えは当を得ていると思います。

米政策のダブルスタンダード（イスラエル政策）と地政学的対立（サウジ・イラン。ことにサウジの「イスラム国」並みの独裁圧制政策を支援してきた米国）が克服され「軍事解決」を国際社会が転換しはじめて、新しい中東の可能性がうまれると私は思います。

中東地域の当事国による話し合いと、「武力解決放棄」こそ戦略的に最も問われているはず。今の米中心の「イスラム国」打倒とは反対の道に早く転換してほしい。

11月2日 昨日の雨から一転秋晴れの連休中。

11月に入って日銀は景気テコ入れとしてまたもや追加緩和。ついでに「年金積立管理運営独立行政法人（GPIF）」でも従来の運用を見直して、国債を減らし国内外株を倍に増やすことで株価を人為的に吊り上げバブル化へとシフトしています。「追加緩和で増える長期国債の年間購入額30兆円。GPIFの運用見直しで減る国債の額と同じ。」と識者。日銀が国債を買うことでGPIFが株を買う資金を用立てるという政府と従属関係になっている日銀です。今までより金を増やせば企業が儲かって、国民所得も増えるという金持ちの思惑。

今や「緩和」を終了した米国の何週遅れの「量的緩和」は米国と同じか、更にひどい格差を作ることでしょう。物価上昇を痛みもなく目指し、税や福祉厚生国民負担を平気で増やし、年金で生活できない人や非正規労働者の苦しい生活者、そうした人々が更に切り捨てられていく道を突き進む安倍政権。どうして許されるでしょう。

11月3日 気持ちの良い秋晴れ。昼膳に祝日菓子として今川焼きが一つ。

フォーリンアフェアーズの論文「悪いのはロシアではなく欧米だ」（ジョン・ミアシャイマーシカゴ大教授。「イスラエルロビーとアメリカの外交政策」というまとめた本を書いてシオニストが批判していたのを思い出します。）でウクライナ問題を論じていて興味深い。

また「情況」でも前に高野猛がプーチン政策で正当な分析をしていたけれど、そこであの有名な3月にユーチューブで公開されていたピクトリア・ヌランド國務次官補の「ウクライナの未来のシナリオ」の電話の話が出ています。ヌランドの夫がネオコンの代表ロバ

ート・ケーガンであり彼女もネオコンの有名人と知って、なるほどプッシュであれ、オバマであれ「アメリカ新世紀プロジェクト」を巣窟として「親イスラエル」「反ソ反共（反ロシア）のネオコンは今も挑発を続けているわけだと理解しました。あの身勝手なヌランドの構想通りの今のウクライナの展開です。ミアシャイマーとは正反対の「戦争」「ロシア封じ込め」の道です。

11月6日 米国の上下院選挙、共和党が両院で過半数を占めたとのこと。オバマ政権の運営が困難になるとの見通しがしきりです。共和党政権時の恐慌から経済を立て直し、失業率も下げたわりには格差の拡大など共和党がつくり出した失政までオバマ非難に転嫁されたようです。「シリア」「イスラム国」への外交またウクライナ問題含む「弱腰」がなじられたとか。プッシュ政権をとりまいていたネオコンや「冷戦好み」「親イスラエル」勢力が共和党勝利の勢いで軍事侵略を「民主主義」の名で推し進めそうな危険な米国政策が出てくるかもしれません。でもこれで大統領選は揺り戻しでヒラリーになるかも。

Kさん「7日から京都楽しみです」とお便りと共に再び美しいトリカブトの花送って下さいました。感謝！今週末の京都は見頃でしょう！

友人からパレスチナの近況。停戦後更に状況は悪化し、オリーブの収穫をユダヤ入植者らが伐採、放火、暴行で妨害、破壊し占領軍が挑発的な「捜索」「逮捕」を繰り返している様子を伝えています。呼応してエジプト軍によるガザとの「バッファゾーン作り」で国境地帯のベドウィンらが移転強要、家屋破壊にあっているとのこと。英国やスウェーデンでは議会がパレスチナ国承認し他の国にもその動きがある分イスラエルは余計抑圧を深めています。また、今でもガザ海上銃撃などイスラエルは続けているとのこと。ガザは停戦後戦時下のように厳しさを増しているのがわかります。歯噛みしつつパレスチナ連帯！

11月8日 昨日の「立冬」は、雲一つ無い秋晴れの青空でした。萩の茂みもいつの間にかきれいな黄色に変わりました。塀の外の桜並木は紅葉して散りはじめています。もう今日の八王子は、最低気温が10度以下です。「立冬」と共に冬がやって来ています。

今日は、14年前に関西で逮捕された11月8日です。あの日も秋の晴天でした。様々な感情を抱えながら見つめた新幹線の車窓に続くのどかな秋がとりわけ目に浮かびます。柿の実の鮮やかな木々、稲束を積み上げた田、紅葉の始まった山野。

逮捕によって被害、ご迷惑を与えてしまった方々にお詫び申し上げます。この日には、11・8以前まで仲間たちと描いたり築いて来た30年近い日々を、教訓と共に思い返します。

そして、また11・8以降、変わらぬ情で支えてくれた友人や家族、そして新しい出会いが、どれほど私や私の仲間たちを助け、励ましてくれたかを感謝しています。

★読んだ本★

(「日誌」の中の読んだ本への記述を編集室が抜萃したものです)

「法服の王国」(上)(下)(黒木亮著・産経新聞出版)を一気に読みました。読みごたえのある面白い本です。泉水国賠訴訟の山下弁護士が推した本というものなるほどと分かります。

この本は小説ですが、司法・裁判所がどのような戦後の歴史を経て現在に至って来たのかがよくわかります。一言で言えば「憲法に忠実であろうとする裁判官を、人事考査でことごとく排除することによって、権力に忠実な国策を付度する裁判所と裁判官が生み出されてきた」その流れがよくわかる本です。

そんな中でも不遇にもめげず、憲法に忠実に初志を貫く人々が少数ながらも居ること、そうした裁判官の良心が「砂川事件」で「米軍は憲法九条に違反する『戦力』と判決した伊達裁判長、それから「長沼ナイキ事件」において「自衛隊違憲判決」を下した福島裁判長、じん肺訴訟判決、

パレスチナ・アラブや海外の旧友たちにも感謝ばかりです。14年、今も無力のまま支えられ、まだ先は長いですが、みんなと共に生きていることを心強く感謝と連帯で実感しています。ありがとうございます。

公判も、痛闘病もみんなが居てこそ乗り越えてきたと、しみじみ思います。こんな歌が零れます。

“無力でも寄与する術を持たぬとも

姿勢崩さぬ山動くまで”

重信 房子

住民勝訴判決や金沢地裁日本海原子力発電所二号原子炉差し止め判決などがぎりぎりのせめぎあいの中で生まれてきた歴史を感動の中読みました。

もとよりこれは小説です。しかし小説を裏付けている歴史的事実や背景にはこの物語が原発裁判に焦点を当てて書かれている分、現状のリアリティーとなって響くのです。

プロローグは主人公村木健吾が金沢地裁の裁判長として葛藤しつつ「日本海原発二号機差し止め判決」を決断するところからはじまり、3・11の東北大震災の起こったところでこの物語は終わります。この物語の主な登場人物は68年に司法試験に合格し、第22期司法修習生となった村木健吾と同期の津崎守ら裁判官として70年から任官する者たちです。その人生がどのような変転を経ていくのか、時代と事件をおりまぜて物語は進みます。

この時代は私たちが学生運動で変革を求めていたことと重なるので、余計興味深いものです。司法においても「伊達判決」以降、自民党や司法官僚らが画策して「青法協」(青年法律家協会。裁判官、弁護士、学者など憲法と人権を守り研究活動していた会)の任官を潰したり、排除が巧妙に激しく非公然に進行していたことがわかります。「砂川事件」につづく「自衛隊違憲判決」の福島裁判長らを人事異動させたり、「統治行為論」(「統治行為は高度の政治性を持った国家の行為であり裁判所の審査権の範囲外にある」として米軍や自衛隊の憲法違反論を最高裁や上級法廷で封じた)で、排除します。

福島裁判長に札幌地裁所長平賀が判決前に判決を変えさせようと介入した「平賀メモ」も公表されました。しかし、当時300議席の衆議院の勢いに乗じた自民党主導の「裁判官訴追委員会」では「平賀所長は、先輩として親切にアドバイスしたのであって、無罪」、反対に自衛隊違憲判決を出した福島裁判長は、平賀メ

その「公表によって裁判官と裁判所の名誉と威信をおとしめたのに反省していない」として弾劾されるという茶番の結果でした。

本書では、「このように自民党はリベラルな判決が出るのは、裁判官が偏向しているからで、その元凶は2500人居た裁判官のうち、青法協に加入している225人だ」として、佐藤内閣や後藤田らが暗躍して、69年1月第5代最高裁長官を代えるところから青法協への圧力(ブルーページ)を強めたのです。

この本の主人公の一人、村木健吾は青法協会員で、70年4月から初任官されます。70年3月には、すでに青法協会員らの任官拒否事件が起こっています。村木ら第22期修習生はちょうど任官直前で、521人のうち503人が「任官拒否反対」に署名しています。その結果、当然のように村木らは誠実でありながら、いわゆる「出世」からはずれた地方にまわされながらも憲法と任務に忠実に生きていきます。

結局、人事を握った保守勢力が最高裁事務総局を基盤に国家権力検察や自民党に忠実な官僚を登用し、福島裁判長らを「冷や飯」に遇して追いやるのです。青法協加入も上司から妨害され教も減る中で、84年青法協から裁判官だけ分離し、別個の組織に再編せざるを得なくなります。

一方、村木と同期の津崎は、上部から見込まれ最高裁事務総局へと出世していきます。津崎は、彼なりに奮闘し、上司に「イデオロギーで選別排除しているようでは、良い裁判官は育たない」と提言し、任官の基準を公明正大にさせたり、能力ある誠実な青法協人材を登用させる努力をしていくのです。

村木は原発差し止めなど、自分の望むとおりの判決に生きがいを持って過ごす中で、3・11大震災を迎え、一方津崎は紆余曲折を経て最高裁長官として民主党政権下司法改革を始め、3・11に遭遇するところで物語は終わります。

「脱原発」の闘い、古くからの伊方原発や能登原発差し止め訴訟団などの原資料を活かした記述は、3・11を経て、「大飯原発」判決勝利へと引き継がれているのを実感しつつ読みました。残念なことに、リアルな私の経験では、裁判官は検察の追認ばかりで、主人公村木や福島裁判長は居ませんでした。(9月21日)

「こんにちは、ユダヤ人です」(ロジャー・バルバース・四方田犬彦共著、河出ブックス)を読みました。とても面白いユダヤ入門書です。ことにアメリカの色メガネのメディアが描く「イスラエル」は痛快に否定され、逆にユダヤ人の深さと広さを知らしめる書とい

えます。

四方田犬彦は知られている博覧強記の人、ロジャー・バルバースは1944年ニューヨーク生まれのユダヤ人で、ベトナム戦争批判からアメリカを離脱して

(捨てて)76年オーストラリア国籍を取得し、日本に何十年も暮らし

東工大で教え、宮澤賢治、井上ひさしなどの英訳を手掛けてきた日本文学、文化、生活に精通した人。

この二人がユダヤ人、ユダヤとはいったいどういう歴史を帯びどんな人々なのか、ユダヤ人を語りつつ世界を語りイスラエルを語り又日本を語っています。その知性と知識の対話は知らないことをたくさん教えてくれます。

目次でいえば大きく4章に分かれ、1章は「私はユダヤ人としてどう育ったのか」バルバースの五代に亘る家族の歴史が具体的地名と共に語られる中に、ユダヤ人全般の歴史的相貌が現れています。19世紀の「強制集住地域」の生活、ロシア、ポーランド、イギリス、オランダそして米国へと家族が代を継いで移り住む、住まざるをえない境遇。時代の事件、地政学、状況の中で勤勉に「住みやすい所に住む」「典型的なユダヤ人」の姿としてバルバースの家族が語られています。そういう環境だからこそアウトサイダーであり、また世界各地を故郷としうる境界に立つ普遍性が生まれ研ぎ澄まされるのだなあとも興味深く読みました。2章は「イスラエルはユダヤ人を代表できるか」3章は「ユダヤ人はアメリカにどう受け入れられたか」4章は「言語でも信仰でも国籍でもなくユダヤ人」です。

私にとって何よりも関心深かったのは、2章「イスラエルはユダヤ人を代表できるか」のところ。面白いことにこの章はユダヤ人であるバルバースはイスラエルに行ったことがなく、イスラエル滞在経験のある四方田が滞在中の経験を詳しく紹介・分析し、バルバースが興味津々に質問しながら「それはユダヤ的だね」「それはユダヤ的ではない」と語るのです。

例えばユダヤ人社会学者のイラン・パペの話、パペはアラビア語を勉強してアラビア語の文献を読まないといスラエルのことは判らないという立場で「ソフラ



ート運動」というのをやった。イスラエルの地名をアラブ語に還元しようという運動で、ハイファ大学から何度も懲戒を受けついに執筆も禁止されてオックスフォード大学に入った話を四方田が語ると「そういう型破りな人がいるのもユダヤ的ですね」と答えるパルバース。

「逆に言えば今のイスラエルの国家体制がはたしてユダヤ的といえるかどうか」と四方田は「政治的シオニズム」の問題を次の四点から指摘批判をしています。

「政治的シオニズムは第一に19世紀の民族主義で植民地主義。ヨーロッパのアシケナジームが中東の場所を植民した。イスラエルはヨーロッパ人の最後の植民地。応えてパルバースは「おっしゃる通り。どこに一番似ているかというアパルトヘイトの南アです」と。

「シオニズムの第二の問題は、ユダヤ教を中心としたユダヤの大きな伝統を、イスラエルという国家は世俗社会を宣言することで断ち切った、ということ。イスラエルはシオニズムという西洋植民地主義のおかげで、ユダヤ教を無視することで国をつくった。だからユダヤ教徒の側はイスラエルは悪魔の発明だと怒っている。」イスラエルは「多民族国家」が実態だと私も考えます。それを「イスラエルイコールユダヤ人国家」と歪曲する政治シオニズムが民族浄化を常態化させ、ユダヤ教をも抑圧し型にはめようとしてきたのがわかります。私はあの地は二国家共存であれ一国家であれ、多民族社会の伝統と自由で平等な人と人との関係にもとづく非宗教国家が求められていると思っています。

「第三はユダヤ人内部で階級差別をどんどん助長している。つまりアシケナジームのヨーロッパ中心主義のために、ミズラヒームやスファラディームの文化、言語、食べものすべてが抑圧排除され、そこにロシア系とエチオピア系が来たことによってユダヤ人の定義不可能性がはっきり露出している。」

「四番目は現下で一番大きいことですけれども、先住民を排除し組織的に虐殺し追放している。クレンジングすることによって成立している社会であり、その根底にあるのがシオニズムであるということ。植民地主義、文化伝統からの離脱、内部ユダヤ人の階級抑圧それから先住民の組織的排除、この四点で政治シオニズムは非常に危険なイデオロギーであり世界に害毒を及ぼしていると思っています。」と四方田。

それをパルバースが「どこか戦前の日本という気がします。」と答え、四方田は「あるいはこれからの日本かもしれません。」と応じています。パルバースは「今のイスラエルがユダヤ人を代表することになったら2

000年の物語を否定されるのと一緒ですね。でも本当は逆なんだ。イスラエルがユダヤ人を代表する素晴らしい国家だと思っている人は、多分イスラエル人とアメリカ人の一部にしかいないと思うんです。あとはどこにもいない。しかし一方2000年のぼくら(ユダヤ人)のナラティブ(物語)はポジティブな風習やしきたりがたくさんあると思っている人は多いと思います。」

こんな風に知性のキャッチボールがいきいきと続きます。二人ともパレスチナなど他の民族の側に立たなくても、ユダヤ人の側からユダヤ人の歴史に立って「ユダヤ人」と「イスラエル」の違いを論じ、批判し目覚めさせてくれる書です。

かつて「日本人とユダヤ人」というベストセラー本がありました。「イザヤ・ベンダサン」を名乗るユダヤ人(実際は日本人)が旧約聖書の蘊蓄でイスラエルシオニズムをそのまま肯定した観念世界から語る「日本人・日本社会論」でした。「日本教」などと着眼、切り口に読ませるものがありましたが、実際のユダヤ人の歴史やイスラエル社会を知らない人が書いたのは見え見えでした。

実際あのユダヤ人論はステレオタイプの表層でしたが、この本は日本人がユダヤ人を模倣して書いたものと違えます。普遍性に聡いユダヤ人気質の二人の、現実から本質へ、本質から現実へと語られるユダヤ論です。「ハリウッドでユダヤ人が受け入れられたのは普遍性。普遍的だから受け入れられたのではなく、普遍性そのものの定義を提供したのだ」という言葉はユダヤ人がただの「アウトサイダー」ではない故なのです。境界に立つユダヤ論から日本論が逆照射されている、そんな考えに至る本です。読んでみてください。

(10月19日)

125号の誤植の訂正とお詫び

- 4頁左列下から14行 草々と→早々と
- 6頁右列19行 再開→再会
- 8頁左列18行 京大の岡真理さんが→トルツメ
- 8頁左列19行 内容が→京大の岡真理さんの記事が
- 9頁左列13行 民衆の暴力→民衆への暴力
- 12頁左列したから11行 自地区→自治区
- 14頁左列下から9～10行 法律や論→法律論や
- 14頁右列15行 2100年以降→2010年以降
- 15頁右列22～21行 通うして→通して
- 15頁右列下から7行 読めるので偉い人
→読めるのです。偉い人
- 15頁右列下から2行 中世→中原中也
- 16頁右列17行 1987年→1988年

西浦隆男さんの逝去を悼む

早川 義輝

つい、このあいだまで元気だった西浦さんが亡くなったという報せを受けたとき、思わずお知り合いの歌人・道浦母都子さんの短歌が脳裏に浮かんだ。

涙もろくなりたるわれと思うとき

怒りのごとき悲しみ襲う

(道浦母都子歌集『無援の抒情』より)

思えば、僕が知る西浦さんは本当に涙もろくて、同志の追悼会や三回忌などの席では人目も憚らず真っ先に嗚咽していた。このうえもなく優しい人だった。

でも、それは彼の晩年の様式であって、僕が初めて会ったときの西浦さんは何となくゴリゴリの左翼官僚みたいで上からモノ言いをする嫌なタイプだった。

僕が20歳ぐらいのとき、僕の居た京都府委員会と、西浦さんが代表していた大阪府委員会は心齋橋通りの2階にあった喫茶店で待ち合わせた。そのときは京都の僕らが取り組んでいた難題やら、その前の4・28日比谷での出来事に対して色々注文を付けられて慥然として帰ったような記憶がある。もうその頃の僕は、西浦さんが活躍していた頃の大学に拠点を置く甘い学生運動のようなものからは完全に撤退していた。時代はすべてが、公安による24時間監視体制のもとでの息を抜く暇も無い、あてどなき非合法活動に収斂してしまっていた。

後年、なかなか会う機会もなく、同志社・新島会館での蒲池さんの追悼会ぐらいのときに偶然同席して以降、親しいお付き合いも復活した。気がついたのだが、もうそのときは全然、僕が思っていた人とは別人のように優しい人格になっていたのだ。きっと長い年月で僕も変わり、彼も変わったのだろう。

そんな西浦さんを、僕は2011年の秋に、丸岡修君の遺骨を彼の妹さんとともに行くペイルートの共同墓地に納める旅に誘った。丸岡君は僕が京都パルチザンのときに何度か銀閣寺アジトに来た。深夜に紅茶を飲みながら、「早川さん、今は僕らもこんな半端な運動界に身を置いているけれど、いつかは社会人になります。だから僕が早川さんに今、勤めている会社のネクタイをセットであげます。」と言い、その数日後、律儀に届けてくれた人だった。誠心誠意のひとだった。それで、前年にPANTAたちとレバノンを巡礼訪問したけれども、もう一度絶対に行かねばならないと思っ

ていた。それに壊されていた奥平・安田・檜森の肖像がある墓も修理せねばならなかったし、また現地の皆さんにも再度会って心からの謝辞を述べなければと思っていた。僕は余りにも長く不在していたから。

西浦さんは、ふたつ返事で引き受けてくれて納骨団に参加してくれた。

それまでに西浦さんは、2005年に僕らが出した『水平線の向こうに』を何度も読み返してくれていて、生前の檜森がやろうとしていた党派を超えた救援活動に共鳴したのか、獄中にある丸岡・城崎・西川の諸君を具体的に支えていこうという趣旨の呼びかけをして自ら連絡と調整に奔走していた。

西浦さんは、全ての大衆に対して、これら弾圧の情報や囚われている人たちの窮状を広く知らせて、それをまた運動の世界にフィードバックしていきたくったのだろう、なんでも情報を共有するのだと多くのメールを頒発したりして、既存の救援者たちを困らせたり驚かせたりしていた。彼らしいやり方だった。

結果的に、西浦さんがレバノンに同行してくれたお陰で、僕は随分と助かった。彼の自然な感受性や汪洋とした性格が、本来、地中海での悲しい旅路になるものを気分的に救ってくれたのだった。墓前で中島みゆきの『時代』を歌うときには号泣し、夕焼け迫るビジョン・ロックでの散骨には、じっとさざ波を見つめて立ち尽くし、パールベックの遺跡では石柱をなで回し、早朝のラウシェの浜には地元の人たちの釣りに混じって佇んだ。それは彼自身、遠い昔の自分が歩んできた苦しい道をまるで振り返るような旅だったのかもしれない。

あるとき、西浦さんと飲んだときに、ふいに泣きながら自分の生い立ちを語っていたことを思い出す。西浦さんは生まれてから3年間も出生届が出ていない子として無戸籍だったこと、高校生になってから西浦姓を名乗るようになったこと、認知してくれた義母さんが非業の死を遂げられたこと、西浦さんが逮捕されたときも、それらこれらを非情な公安刑事が病床にある実父にも「オマエのせいだ」と責め立て続けたということ。実のお母さんと腹違いのお姉さんたちが一生懸命に可愛がって育ててくれたことなどなど……

ああ、やっぱりと思った。この人の優しさは、そもそも掛け値無しのものだったのだ。僕も幼いときに両

親を亡くして祖母によって育てられたが、後年になっても未だに「親のことをよく知らない」というアキレス腱を抱えて、自らのアイデンティティーに苦しんでいた。西浦さんは「大学へ進んだ頃になってようやく自分のことを人間として認められるようになった」と言っていたと通夜の席で奥さんが皆に明かしたのが印象的だった。

他人に対する愛も惜しみも、本当は自分が一体何かを知っていることから始まるのに、西浦さんも僕も、はからずもその前の段階から考え尽くさねばならなかった。けれども、それゆえにこそ、困っている人々には我が身に置き換えて親身に考えることができるし、何よりもまず柔軟に相手を受け入れることができる。西浦さんのときおり見せる涙もろさと優しさは、義理と人情の学生運動などで培われたものではない、彼の生い立ちにこそ深く関係していたのだった。

今年の5月、あべのハルカスに呼ばれた僕は、西浦さん旧知の先輩の娘さんに紹介された。聞けば、頑固な左翼であるお父さんの方針で、ろくに学校にも通っていなかったという。今は夜間高校に通って、その先は資格を取って働きたいというその双子のひとりと楽

しくランチを過ごし、別れ際にほろ酔い気分の西浦さんは、「なんかあったら、このひとに相談するんやで」と彼女に言い残して去って行った。それからわずか3週間後に、西浦さんは全身ガンだと診断されて入院し、10月にはとうとう余命を潰えさせてしまった。

ペイルートのお墓には、「丸岡君が好きだと言っていた仙台の『萩の月』を、お供えて持ってきたんや」と並べる。2012年のライラ来日の京大西部講堂では、パーシム・サラハ・ユセフ・ニザール四戦士の遺影を飾るために奥さん手作りの白い大きなテーブルクロスを持って来てくれた。細かいところまでよく気の回る頼もしい兄貴分だった。

この世ではもう会えなくなった西浦さん。拾って育てたイヌやネコも大好きだった西浦さん……

そちらでは思う存分に釣りを楽しんでいますか？僕らが辿り着くまでにはあとちょっと待っていて欲しい。いつものように、まったりと、肩の荷を下ろしながら、ゆっくり休んでいてください。

切り立ちて鳩も通わぬ岩ふたつ

痩せ学生の夢の痕視つ

合掌

アラブ物語(28)

「パリ事件」ハーグ闘争から日本赤軍結成へ—74年(6)

重信 房子

3 PFLPからの自立—日本赤軍の結成に向けて

3) ハーグ闘争部隊の帰還交渉

シリアにハーグ作戦部隊が投降した直後から、私たちはPFLPの国際関係局と、作戦部隊をダマスカスからペイルートへ一刻も早く連れ戻す対策を話し合った。国際関係局は、「すでに作戦は終了したので、アウトサイドワークに替わって、ダマスカスからの帰還交渉は自分たちの責任で行う」と告げてきた。軍事的に自立を考えていた私たちも、国際関係局が責任を持って作戦部隊を解放してくれるなら、その方がよいと考えていた。

PFLP国際関係局を通して、シリア系のパレスチナ組織、サイカの責任者ズヘイル・モーセン(1979年モナコ滞在中にモサドに暗殺された)と会い、部隊の即時帰還への協力を求めた。

国家(シリア)への不信任、ことにPFLPがシリアと路線的にも対立していたために、シリアが本当にきちんと対応してくれるか気がかりだった。そこで、

私たちの仲間がすぐ解放されるとズヘイル・モーセンが約束してくれたが、その前に部隊の安全を確認するために、ペイルートに居た私たちの仲間がシリアの部隊に会いに行くことになった。サイカの協力を得て、作戦部隊の仲間と会い、10月にはペイルートに戻る準備を確認できた。

こうして作戦終了を経て、一方、ヨーロッパから逃れてきた人々の受け入れ対策や会議、他方、部隊の帰還工作と受け入れ準備、非軍事的ボランティアたちのこれまでの活動の総括、在欧日本人たちの活動の総括など、一度に多くのことが押し寄せた。

PFLPは、パレスチナ・ミニ国家路線の右派の策動(サダト大統領を介してアメリカとミニ国家路線で直接交渉しようとした)に抗議して、9月27日、PLO執行委員会から撤退した。政治的に重要な局面にあった。

そうした中で、私たちはこれまでの活動についてそれぞれが整理しながら、パリでの被害を乗り越えて、

新しい条件を作り上げようとしていた。非軍事的部署では、会議を先行し、これまでの自分たちや在欧のあり方、PFLPとの関係などを批判的に総括しつつ、日本国内とも協同協力にふさわしい組織的条件を模索していった。

「ステーションとしての党」の緩やかな各地の当事者主義は、欧州での自供に伴って敗北してしまっていた。ニザールやアリからも「覚悟性ある組織こそ作るべきだ」とこれまでのあり方は批判されていた。在欧Jらのグループの間では、パリ事件の敗北の実体を把握しつつ、今後PFLPの指揮下から自立していくアラブ赤軍と、どういう関係を結ぶべきかが討議されていた。

こうした討議に、8月の代表者会議(当時、「委員会」と呼んだ)でまとめたレジュメのたたき台を再編しながら共通認識を作ろうとした。パリ事件の反省、「ホンヤク作戦」の反省を踏まえて、PFLPのアウトサイドワークへの批判、そして、政治的にはアラブを含むアジアを軸とする様々の組織による統一戦線運動によって闘う仲間の協同を拡大しながら、日本国内の基盤、在アラブ、在欧の基盤を作り上げていくこと、その第一歩として、今、在欧の敗北とハーグ作戦の勝利を踏まえて、自供しない覚悟のある組織を作るとした。ことに、パーシムグループのニザールが戻って、在欧の敗北を克服する導きの糸として「リッジ闘争の地平」を出発点にすえようとした。「リッジ闘争の地平」を再び堅持し、覚悟性を持った組織を作るということが必然的で、自然な組織結成の要となった。

4) 軍事的部署の会議

ダマスカスからハーグ作戦を闘った部隊が二回に分けてペイルートに帰還した。まず、YとB、次の週にWとNがペイルートに戻ってきた。ペイルートに戻ったYとBは、軍事的部署のリーダーのニザールを中心に軍事指揮体制を整えるよう支える体制をとった。そうしているうちに、WもNも戻った。ペイルートに居た者たちも含めてニザールのもとで、軍事部門の会議を始めた。

この軍事的部署の会議の中で、これまでのPFLP、アウトサイドワークの指揮下のアラブ赤軍から独自の日本赤軍への再編をめざすことを意志一致していくことになる。すでに非軍事的部署、在欧の仲間たちも先行して会議を進めてきていた。

ハーグ作戦総括会議を踏まえて、「委員会」レジュメを討議した。「国際主義と組織された暴力」、「リッジ闘争の地平」を堅持し、覚悟性を持った軍事委員会を



作っていくことを確認していった。こうして、ニザールの指揮下、これまでの軍事的ボランティアから日本赤軍、軍事委員会としての体制を創っていくことになった。

新しい組織づくりのための会議は、非軍事的部署、軍事的部署、在欧グループの間でも同時並行的に討議されて、11月には方針討議が行われた。この方針討議を経て、12月に各部署で討議一致して、PFLPから自立し、日本赤軍として誕生した。

これまで日本に向かってはアラブ赤軍と名乗り、国際的には「日本人の赤軍」として認知されてきた。「アラブ赤軍」と規定したのは、リッジ闘争直後、日本の赤軍派と区別した私たちが、アラブから日本に今後生まれ来る革命党に合流し、いわばその国際部の役割を果たそうという考えに基づいていた。(当時のアラブ赤軍72-6-15テーゼなどに出ている)しかし、自らが積極的にその役割の一翼を担うことなしに日本革命党も待機的に過ごすことはできないという思いをこめて、自ら「日本赤軍」と名乗り、国際国内の闘いをめざそうとした。

当初描いていた「ステーションとしての党」から、その失敗を強く意識して軍事的覚悟性を持つ確固とした組織という、これまでと反対のイメージの組織づくりとなっていた。

そこでの主な点は、世界革命の一翼として、国際、アジア、国内の革命勢力の統一戦線を強化していくこと、独自の組織として日本赤軍の立脚点はリッジ闘争の継承として、覚悟性ある闘いを担う組織として出発すること。これまで、私やJのやってきていた、「ステーションとしての党」などとして覚悟性のない者まで一緒にしてきたようなやり方はしなかった。

この時、自供したのは弱い覚悟性のない在欧の人間たちであり、アラブ赤軍のYは自供しなかったという、在欧の人々を蔑む思いがあがった態度があった。また、PFLPアウトサイドワークが自分たちを将棋の駒のように扱ったという不信と批判もあった。

今からとらえれば、欧州の日本人を批判し、PFLPを批判し、自分たちがハーグ作戦で勝利したことで、

オリーブの樹 第126号

自分たちがリッダ闘争の地平によって闘い抜けば、何でも解決できるという驕った傲慢な「自信」を持って出発した。そのことは、後に75年にしっぺ返しを受けることになる。

しかし、この時には、私たち全員一丸意気揚々とPFLPから独立した。これまでを第1次建軍運動、これからを第2次建軍運動と位置づけて出発した。組織体制も綱領規約を確立するまでの過渡的体制として、政治委員会、軍事委員会、組織委員会の3委員会体制をとった。そして、日本赤軍の誕生日を、遡ってリッダ闘争の72年5月30日とした。また、水死したオールド山田さんを含むリッダ戦士たちも、最初の日本赤軍メンバーとして確認した。

こうして、PFLPから独立する方針を確認した。74年11月～12月、全員持ち回りの各委員会の中で確認しあって、日本赤軍は独立した組織として再スタートした。この時、在欧メンバーが日本赤軍に参加するか否かは個人個人の判断に委ねられた。また、欧州に残っているメンバーに、これまでと違うアラブ赤軍から日本赤軍への転換を伝え、どういふ風に共同参加していくかが話し合われることになった。そのため、12月意志一致内容を持って避難していた在欧メンバーのGが、その会議のためにヨーロッパに戻った。

しかし、その3ヵ月後、在欧の彼らに断り無くストックホルムに出張した仲間が逮捕された。そのため、在欧の人々も防衛に追われ、その後、GもJも後に逮捕されてしまった。

その結果、在欧の日本人仲間、在欧のJの連携していたアジア人グループなどとも関係が途絶えることになった。

また、PFLPとは独立を確認し、共同共闘のあり方から話し合った。この時から、これまでは国際関係

局の指揮や枠のもとにあった他の組織との交渉はPFLPではなく、日本赤軍の責任において行われることになった。しかし、新しいフリーハンドの組織日本赤軍は、まだ多くのものが欠けていた。

まず政治的準備である。政治委員会は、75年5月30日までに、これまでの政治的総括をふまえて、綱領的内容、組織の政治的柱となる文書を準備することになった。赤軍派から参加していたのは私だけだったし、ブント、革共同系ノンポリ、非政治的な人々まで様々な理由から新しい日本赤軍で闘うことになった。そのために、これまでの日本の新左翼運動をとらえ返しつつ、新しい方針をもって世界に通用する組織としての政治的柱を確立するために、政治委員会がそのたたき台を提起することになった。こうして綱領規約を75年に獲得しながら、組織の形態も整えるとしていた。そのため、政治委員会、組織委員会、軍事委員会は、過渡期の組織体制として確認していた。

組織委員会は、これまでの友人たちの個人的な繋がりを組織的なものに変化再編していった。これは政権党や在欧などの組織への対外工作を政治委員会が主に担当し、パレスチナ、アラブの組織への対外工作を組織委員会が担当した。

国家に関わることは外交問題を起こしかねないために、PFLPも機密扱いにしていたので、それに倣って、政治委員会が担当するようにした。

また、軍事委員会は、組織委員会で政治的に信頼が確認された上で、軍事的共闘を望む組織への工作は、直接軍事委員会が担当した。また、保安、武器兵站など、これまでPFLP、アウトサイドワークとの関係も、軍事委員会が直接担当した。

相互に役割を分担し、組織としての活動を開始していくのは、75年1月からであった。（この章完）

後記

西浦さんが逝ってしまった。彼と過ごしたいろいろのことが思い起こされ、亡くなったなんて、いまだにうそのようで、悲しいというより、なんとも納得できないで、力が抜けたような状態です。少し具合が悪いから、先生に診てもらおうかと、軽い気持ちで病院に行ったら、かなりの末期癌の状態だったようで、即入院させられたのだそう。もう手の施しようがなくて、余命3ヶ月と言われ、本人自身がびっくりして、信じられなかったそうですが、医師に逆らって、あらゆる治療をトライしたけれど、なかなかよくなりならず、先生は何でこんなに悪くなるまでほっておいたのだと、西浦さんと奥さんをなじったそうだが、本人は、まったく自覚症状が無かったのだそう。闘病体制をとって、10月6日に一旦退院しようとしていたのだそうですが、最後の2、3日で坂を転げるように急に悪化したとのこと。4日の夕方、万起子さんから電話で知らされ、びっくり。6日は告別式になってしまった。奥さんの万起子さんに聞くと、まだ、彼がどこかに居るようだとのこと。そうだといいのだけれど。共に、支え合う道を見つけていきたいですね。犬と猫も一緒に。Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

頒布価格 500円

「正誤」表

第 126 号

- ① 4P(9/18)左下から3行目 「国策」を付託→「国策」を付託
- ② 5P(9/23)下から11行目 ~米国製携帯滞空ミサイル
→~携帯対空ミサイル
- ③ 5P右上から16行目 拒否を投じ→巨費を投じ
- ④ 6P(9/27)右6行~7行目 「朝日ニュースキャスター」以外にもメイが関
わった仕事にも、触れて、それらのやり方にうんざりだという。(挿入)
- ⑤ 8P(10/9)右下から2行目 お終いの→お経の
- ⑥ 9P「戦友西浦隆男を悼む」4行目 そしてまた「見舞った友人~
→そしてまた見舞った~
- ⑦ 9P(10/10)右下から2行目 こうして作り続ける→抗して作り続ける
- ⑧ 11P(10/22)14行目 インターナショナル→インターナショナル
- ⑨ 12P(10/30)左下から4行~3行目 ポプラがが落葉→ポプラが落葉
- ⑩ 12P(11/3)右下から13行目 地域的 * 敵対勢力→地域的な敵対勢力
- ⑪ 13P(11/3)左下から5行目 高野猛→高野孟
- ⑫ 14P右下から12行目 自営隊違憲→自衛隊